

自著を語る (No. 97)



増田 将伸 [ほか] 編
『会話分析の広がり』
ひつじ書房, 2018



(801.03||HIR 2階 教員文庫ほか)

本書で「会話分析 (Conversation Analysis; CA)」と言われているのは、1960年代にアメリカで社会学の一分野として生まれたひとつの方法論のことです。したがって、ここでの「分析」は、この分野の目的意識や分析手法に従ってなされるものであり、日常的な感覚で単に「(どのようなやり方であれ) 会話を分析する」と言う場合より限定的な意味で用いられています。本書第1章で論じられているようなCAの方法論をふまえて本書を読んでいただくと、論の展開が理解しやすくなるかと思います。

本書は、この「会話分析 (CA)」に関心を寄せる人が「教科書の次に読む本」というような位置づけで、「教科書と学術論文の橋渡しをする」ことを狙って書かれました。【なお、CAの教科書としては高木智世 [ほか] 著『会話分析の基礎』(ひつじ書房, 2016 801.78||TAK) や串田秀也 [ほか] 著『会話分析入門』(勁草書房, 2017 801.03||KUS) をお勧めします。】つまり、全くの初学者を対象とした教科書ほど丁寧な説明はありませんが、各章のトピックについて概説がなされ、そのトピックについて全体の見取り図を得られるようになっています。また、各章では具体的な会話の分析例も示されており、学術論文で展開されるような分析や議論にふれられます(学部生の皆さんなら、おそらく第7章が一番とっつきやすいと思います)。

CAでの論証は、定量的な証拠を伴わないことがほとんどで、見慣れない印象を受けるかもしれませんが、示されている会話例と分析を突き合わせて読むこと

で、会話の中に具体的な根拠を持った分析がなされていることを確認していただけたと思います。また、分析が会話参加者の視点に根差して、会話の一瞬ごとの展開に即して組み立てられていることもCAの特徴です。会話の展開は一瞬ごとに変わっていきますが、CAでは、発言のタイミング、スピード、音調など様々な手がかりを基に、一瞬ごとの会話参加者の視点を分析に反映させています。このように、発言の意味内容だけでなく様々な細かい手がかりが精確な論証に結びついていることも感じ取っていただければ幸いです。

本書の特徴は、本書のタイトルでもある「広がり」という語で表されます。本稿冒頭で、CAは1960年代に生まれたと書きましたが、CAは学問として歴史が浅く、まだ議論が決着を見ていない論点もあります。本書では、そのような新たな論点への議論の「広がり」をとらえ、現在進行形の議論を紹介しています。また、言語学など他分野の学問でのCAの利用、英語以外の言語でのCAなど、近年顕著にみられるようになったCAの射程の「広がり」をも扱っています。「会話分析」という名前からは想像しにくいかもしれませんが、会話参加者の身体の使い方や、会話の物理的・社会的環境も分析において重要な位置を占めています。そうした分析例も、本書で示されています。

本書を手にとって、会話の種類も分析の視点も多様な会話分析の「広がり」にふれながら、会話分析が人間のやりとりの仕組みを描き出している様子を感じ取ってみてください。

(ますだ まさのぶ 共通教育推進機構教員)